

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会
(三八地区) (第3回) 概要

日時：令和3年2月9日(火)
13:30～15:30
場所：八戸プラザホテル
2階 プラザホール

<出席者>

委員

伊藤 博章 委員、友田 博文 委員、澤田 尚 委員、宇藤 裕夫 委員、
高橋 力也 委員、丸岡 博 委員、岡田 稔 委員、石橋 伸之 委員、
野田 尚志 委員、中野 正信 委員、武士澤勝利 委員、三浦 勉 委員、
木村 一夫 委員、米田 清治 委員、里村 智彦 委員、高谷 正 委員、
久慈 恵司 委員(進行役)

オブザーバー

一戸 利則 県立八戸高等学校長、 黒坂 孝 県立八戸東高等学校長、
佐藤 昭雄 県立八戸北高等学校長、 渡辺 学 県立八戸西高等学校長、
富田 義明 県立三戸高等学校長、 清川 和幸 県立五戸高等学校長、
小野 淳美 県立田子高等学校長、 浅利 成就 県立名久井農業高等学校長、
福嶋 信 県立八戸水産高等学校長、 瀬川 浩 県立八戸工業高等学校長、
久保敬悦朗 県立八戸商業高等学校長、 高橋 秀樹 県立八戸中央高等学校長

1 開会

2 事務局説明

- 事務局から、配布資料の概要及び意見交換の進め方について説明した。

3 意見交換

(1) 「全日制課程の学校規模配置に関する意見(重点校・拠点校・地域校の配置等)」
について

- 事務局から、資料1-6及び資料2について説明した。

(2) 「全日制課程の学校規模配置に関する意見(委員の意見に基づく学校配置)」
について

《ア 全ての学校を配置する場合》

- 事務局から、資料1-6及び資料2について説明した。

- 進行役から、八戸商業高校から大学等への進学率が高い理由等について、オブザーバーである八戸商業高校に情報提供を求めた。

- （八戸商業高校） 八戸商業高校から大学等へ進学する主な理由としては、専門性を更に高めて、広い視野で社会貢献したいという意欲の表れであると認識している。商業高校で学習した専門性を生かし社会で活躍することを考えると、高等教育機関で学ぶことは不可欠な条件であると考えている。また、高校と大学の7年間を継続した専門教育によって、公認会計士や税理士等のビジネス分野のスペシャリストの育成にもつながっている。そのため、進学率の高まりは歓迎されるべきものと認識している。

■ 委員から、次のような意見があった。

- 岩手県との間で結んだ県境隣接地域県立高等学校入学志願者取扱協定に基づき、特定の地域において、お互いの県境を越えて県立高校の受検が可能となっている。この協定により、三戸町、田子町、南部町から岩手県二戸市内の福岡高校等へ、逆に二戸市からは三戸高校へ通学している生徒がいる。仮に三戸高校がなくなれば、二戸市から見ると通学できる地域から普通高校が1つ減ることになる。

また、三戸高校は普通科の中に商業系の科目を学習できるコースがあることから、存続させていただきたい。仮に三戸高校がなくなると、三戸町や田子町の中学生にとって、最も近い県立の普通高校は岩手県立福岡高校となってしまいうことから、青森県内に三戸町や田子町から最も近い県立の普通高校が1校あったほうが良い。

- 専門高校については、第1期実施計画で学級減が行われており、第2期実施計画における学級減については、八戸市内の普通高校が対象になると考える。重点校である八戸高校は6学級規模を維持し、八戸東高校、八戸北高校、八戸西高校の普通科から2学級減することが現実的ではないか。

八戸西高校は一昨年まで普通科4学級、スポーツ科学科1学級であったが、五戸高校の募集停止に伴い普通科が1学級増えたことや、今後の生徒数減少を考慮すると、八戸西高校普通科は学級減の対象と考えられる。もう1学級減については、八戸北高校、八戸東高校が対象となると考えるが、地理的な条件や志望状況等を基に検討することになるのではないか。

- 今の委員の意見に賛同する部分もあるが、八戸西高校普通科については、同科の志望倍率が例年高い数値で推移していることや、五戸高校の募集停止に合わせ1学級増やしたことを考慮すると、学級減の対象とすることには納得がいかない。八戸西高校普通科の学級減については、慎重に検討していただきたい。

- 第1回会議に出席していないので、その場で説明があったかもしれないが、資料1―6の1ページにある中学校卒業生数及び県立高等学校募集学級数の見込みについて確認したい。令和4年度の東青地区の中学校卒業予定者は2,49

2人、三八地区は2,418人でそれほど差がないが、募集学級数を比較すると、令和4年度の東青地区は46学級、三八地区は39学級となっており、三八地区は7学級少ない。また、令和4年度から令和9年度までの中学校卒業生数は、東青地区は276人減、三八地区は156人減、学級数数は、東青地区は4学級減、三八地区は3学級減となっており、中学校卒業生数の減少の割合等を考えると、東青地区と三八地区では募集学級数がアンバランスになっている印象を受ける。この募集学級数の削減の考え方は、地区だけを考えたものか、それとも県全体を考えたものなのか。

→（事務局） 募集学級数等の削減の考え方については、中学校卒業生数だけではなく、各地区の進学率、各地区間の流出入、私立高校への入学、他県との流出入等を総合的に勘案し、推計値を算定している。

《イ 三戸高校と名久井農業高校を統合して新設校を配置する場合》

■ 事務局から、資料1-6及び資料2について説明した。

■ 委員から、次のような意見があった。

○ 統合校の配置については校舎を新築するのか、または、既存の校舎を活用するかによって、議論の方向性は異なってくるものと思う。

現在三戸高校も名久井農業高校も定員割れしており、このシミュレーションのとおり統合しなければならない状況にあると思われるが、三戸町も南部町も高校存続に向けた署名活動等、地元の学校を盛り立てていこうとする機運が高まっている状況にある。三戸町役場職員が三戸高校内に設置されている学校魅力化推進委員会へ参画し、高校の魅力化について、教職員とともに検討している。また、三戸町としても、例えば資格取得、通学費、部活動遠征費等の支援を行う方向で検討を進めているところである。

三戸高校には、三戸町、田子町、南部町、新郷村、五戸町の生徒が入学しており、この5町村の人口は合計で約5万人を超えている。三戸高校が1学級になっても、ICTを活用した学びといった高校の魅力化等に地域が協力しながら支援していくことで、生徒数の減少を食い止めることにつながり、定員割れは改善していくのではないかと。名久井農業高校においては、水の研究で世界一になったことを積極的にPRしていくことで、生徒数を確保できるのではないかと。

○ 三戸町、南部町及び三戸郡町村会では三戸高校と名久井農業高校を存続させるための体制をとっている。名久井農業高校と三戸高校が統合することで、ある程度生徒数が増え、部活動等において効果があると思われるが、統合校の学科は、普通科1学級、農業科2学級になると考えられるため、三戸高校を地域校として配置した場合と、生徒が勉強する共通教科の科目数は増えず、物理や公民等の科目選択の幅が広がらないと考えられる。

遠隔授業については、前回会議で課題が挙げられていたが、今すぐの実現は難しくても、数年後に実現できるよう準備を進めていく必要があるだろう。

- 第1期実施計画では、2年連続で入学者数が募集定員の半分を下回ると、その学校は自動的に募集停止になるとのことであったが、今後もこの手順を継続するのかを確認したい。

→（事務局） 地域校の募集停止の基準は基本方針に盛り込まれており、1学級規模の地域校の募集停止については、募集人員に対する入学者数の割合が2年間継続して2分の1未満となった場合としている。その際、その高校が所在する市町村等と募集停止等に向けて協議を行っていくこととしており、自動的に募集停止するというわけではない。

第2期実施計画策定に向け、基本方針検証会議に基本方針の改定の必要性について検討・検証していただいたところ、この基準については現状のままとなったことから、第2期実施計画期間についても、この基準に沿った対応を想定している。

- 参考資料の県立高等学校基礎データ等によると、三戸高校の志望倍率は、平成30年度は0.47倍、令和2年度は0.43倍となっており、厳しい状況である。また、名久井農業高校の令和3年度の志望倍率が0.64倍まで落ち込んでいる。高校を卒業して直ちに就職する人が少なくなっていく中で、できるだけ進学に有利な高校に生徒が集中していくのかもしれないが、結局のところ、もっと分かりやすい形で各校の魅力化を進めていくことが大きなテーマになるのではないかと。

(3) 「全日制課程の学校規模配置に関する意見（その他の意見）」及び「定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見」について

■ 事務局から、資料1-6及び資料2について説明した。

■ 委員から、次のような意見があった。

- 三八地区だけではなく県内の地域校では、教員数により開設科目数が限定されるという課題がある。前回会議において遠隔授業の課題が挙げられていたが、公教育として、今後遠隔授業等を進めていただきたい。子どもたちの夢や志を地元の高校で実現できるようにお願いしたい。

- 県立高校教育改革は、生徒数減少への対応等が大切な取組であるが、各自治体がこれから先の20年後、30年後を見据え、どのような社会を作っていくのかを検討することに直結していると考えられる。私は小学校で教育を行っており、数年後子どもたちが高校へ入学していくことを考えると、持続可能な社会を作っていくことが大切だと考えている。

環境、水、エネルギー等を学習している名久井農業高校は、SDGsを推進する人財を輩出できる環境が整っている。持続可能な社会は、誰かが代わりに実現してくれるのではなく、地域主体となって実現していく必要があり、名久井農業高校には大切な役割があると考えている。

また、三戸高校は三戸郡の中心にある学校として地域を盛り上げる役割があり、小さい学校だからこそSDGsが求める人財を育成できるものとする。SDGsを推進する教育等を進め、小・中学生が入りたいと思えるような魅力ある学校づくりを目指してほしい。

名久井農業高校、三戸高校ともに、持続可能な社会をつくる人財育成を進めていくというビジョンを持って、教育活動を進めてほしいと考える。小・中・高が連携して取り組んでいきたい。

(4) 「多様な教育制度に関する意見」及び「その他」について

■ 事務局から、資料1-6及び資料2について説明した。

■ 委員から、次のような意見があった。

○ 名久井農業高校において全国からの生徒募集を導入する際、校名の「農業」が与えるイメージが、逆効果になる可能性があると思う。また、現状の学科名からは学習内容をイメージすることが難しい。例えば、SDGsや水資源に関する研究を前面に打ち出す形で現在の教育課程を見直し、名久井という名称を残しながら、イメージアップにつながるよう校名を変更して、全国からの生徒募集を導入することが考えられる。

また、第1回会議で配布された中学校の進路状況によると、例えば南部中学校からは名久井農業高校へ進学するよりも八戸市内の高校へ進学する生徒数が多い。その多くは普通科を希望していると考えられ、農業という名称に抵抗があるのかは分からないが、これまでの農業高校に対するイメージがあると推測する。名称を変更することで生徒の流れが変わり、八戸市内からも生徒を呼び込めると思う。

仮に三戸高校や名久井農業高校がなくなれば、三戸郡の生徒は二戸市内の高校もしくは八戸市内の高校へ通学することになり、各家庭の交通費負担が課題となる。各自治体において、通学費の負担を検討しているようだが、逆に八戸市内の生徒を三戸郡へ呼び込むためにスクールバスを出すこと等、発想を変えることも考えられる。

■ 進行役から、全体を通じた意見や感想を全委員に求めた。

○ 八戸市に高校が集中してしまうことで、三戸郡の町村にとっては、地域の衰退が懸念される。仮に三戸高校と名久井農業高校を統合した場合、三戸町と南部町いずれの生徒も、今よりも確実に通学が不便になると考えられることから、

三戸高校及び名久井農業高校を存続させ、それぞれが選ばれる学校となるよう、魅力ある学校づくりに向け、これまで以上に努力していくことが良いのではないかと。

名久井農業高校の実績はこれまでの積み重ねによるものであり、教育の質は必ずしも生徒数が多いければ良いというものではない。研究成果等の実績は小規模校である名久井農業高校が生み出したことは事実である。三戸高校においても良い教育ができれば、地域を背負っていく人材を輩出できるだろう。

- 三戸高校の志願者は5、6年前までは70人を超えていたが、地域の中学校卒業生数はそれほど減少していないにもかかわらず、生徒の進路志望の変化により、昨年度と今年度は大幅に減少した。しかし、魅力ある学校づくりに行政も含めて地域全体で取り組んでいくことによって、生徒から選択される高校とすることができると考えている。

今年度の一次進路志望状況から、八戸市内の県立高校も倍率が低下しており、私立高校の特色ある教育活動が受け入れられていると感じている。前回会議において、委員から八戸市立根城中学校でも私立高校を専願する生徒が50人程度いるという情報提供があったが、県立高校、私立高校を問わず魅力ある高校が大切であり、子どもたちが行きたいと思う学校を作ることによって、生徒の志望状況は変わっていくものと思う。県立高校は県教育委員会とより一層連携しながら、学校の魅力づくりをしていく必要があると思う。

- 私立高校の入学者数を十数年前と現在で比較すると、ほとんどの私立高校で入学者数が減少している中、入学者数を増やしている私立高校全日制課程や通信制課程があり、これらの学校はそれだけ魅力があるものと考えている。

次に、寄宿舎については、各委員から寄宿舎があれば良いという意見があるが、誰がどのようにすれば、寄宿舎の設置が実現するのだろうか、このことは課題である。

最後に、通学費補助等について、各町村で支援の動きがあるようだが、県でも高等学校奨学金通学費等返還免除制度がありながら周知できていない。また、この制度については、要件が緩和されるとありがたい。

- 先ほどの事務局からの説明では、募集学級数について各地区の進学率や地区間の流出入等を勘案し決定しているとのことであったが、具体的な数値等を示してほしかった。

全国からの生徒募集については、田子高校の志願者が減少していく中、後援会等の学校関係者からは田子高校への導入について意見が上がった。高校の存続が厳しい自治体では、そのような意見が出るのが予想されることや、導入に当たり高校が所在する自治体からの支援が必要と考えられることから、自治体から導入について強い要望があれば認めていただきたい。

また、遠方から高校へ通う生徒のために、通学支援、もしくは宿泊場所を完

備していただければありがたい。

- 第3期実施計画では、更に4学級の削減が必要になるため、大きな改革が予想されることから、第2期実施計画では全ての高校を配置していただきたい。
名久井農業高校存続のため、先ほど他の委員からあった「農業」の名称についての意見は一理あると考えている。また、約2割の生徒が八戸市内から通学しており、更に入学者が増えるよう、町としてはバスの利便性向上等の検討を進めているところであり、全面的に名久井農業高校を応援していきたい。
- 普通高校と専門高校はある程度バランス良く配置する必要がある。それぞれ個性や能力等を持った子どもたち一人一人が、自分に合った高校を選択していくためには、普通高校、多様な専門高校がバランス良く配置されることが大切である。この点を前提に学校配置を検討する必要があると考える。
今後、生徒数が減少していくのは、青森県のみならず全国共通の課題と認識している。他県では特色を打ち出しながら全国からの生徒募集を既に実施しており、本県においても導入は避けられないと思う。他県が積極的に進めている中、本県生徒の他県への流出のみにつながりかねないため、生徒の生活環境の確保等の様々な課題はあるが、導入を進める必要がある。
- 生徒の選択肢として、できるだけ現在配置されている高校を存続してほしい。
新郷村の地域的な特徴として、上北地区の三本木農業高校への入学が多い状況がある。三本木農業高校で学んだ後、地元へ戻ってくる生徒や、名久井農業高校で学んだ後、地元へ戻ってくる生徒もいることから、生徒の選択肢として2校の農業高校の存続をお願いしたい。
- 参考資料の三八地区の県立高校の5年平均定員充足率では5割を切っている高校がないことから、保護者としては全ての高校の存続を希望する。また、意見交換会の根底を崩すことになるが、学級減を行わず全ての高校の存続、そして子どもたちが私立高校も含め希望する学校で高校教育を受けられる環境を希望する。
中学校卒業者数及び全日制課程の募集学級数の見込みにおいて、令和14年度県内6地区で最も中学校卒業者数が多いのが三八地区となるようだが、募集学級数では県内3番目の規模となっており、中学校卒業者数に見合う募集学級数になっていないと思われるため、今後の高校教育改革において、県全体での枠組みで募集学級数を検討してほしいと考えている。
- 参考資料の県立高等学校基礎データ等によると、八戸高校、八戸東高校、八戸北高校、八戸西高校の4校の進学率の平均が92.2%、就職率の平均は5.5%となっており、私が高校生だった頃と比較して、いかに進学率が高まっているのかがよく分かる。一方で戦前、この地域には旧制中学校は青森県立八戸

中学校、県南では岩手県立福岡中学校しかなかったが、社会は高校教育を必要とし、今日に至っては大学まで求められるようになった。その背景には、人材育成の中で学歴を求める社会的ニーズがあるものと思う。

上級学校への進学が子どもたちの将来に大きく関わっている現代社会において、三戸高校や専門高校の在り方について、このような会議の場で議論できることに意味があると思う。先ほど他の委員から、高校に対する印象がすごく大事だという意見があったが、今回のテーマのカギになる部分と考える。

高校は社会への出口であり、そこに向かって人材育成を行っているということを知ったことがあるが、高校の選択に当たっては世間の人々が各校に対して抱く印象が大きく関わってくると考えている。中学生は自分の学力等に応じて高校を自由に選択するが、各校に対するイメージを持っており、それに左右されるのではないか。その点で、現在様々な課題を抱えている高校は、学校に対する世間のイメージを良い意味で大きく払拭することに取り組む必要があると考えている。

- 高校の在り方や、高校と産業界や地域との連携等、様々な課題があり、ブランドデザインから考え直さなければならない時期に来ているのではないか。長年続く不況において、子どもたちが夢や志を持って、働きたいという気持ちを持てなくなったことで、とりあえず大学等へ進学することにつながっていることも考えられ、そういった中では、農業高校、水産高校、工業高校、商業高校の役割は、これからもっと見直されるべきである。

学級数が減っていく中では、統廃合が行われることも考えられるが、これからの時代に合ったこの地域のために必要な新設校の設置を議論していかなければ、少子化や新しい時代の到来に対し、この地域の準備ができないと強く感じている。

- 今後の人口減少や少子化は大きな課題であり、地元で高校がなくなると町の活力が衰え、過疎化につながる。子どもたちが将来この町で働きたいと思えるよう、地元企業や自治体と連携しながら、商工会青年部活動を通して、三戸町の魅力について子どもたちと一緒に考えていきたい。
- 教育改革は理念が大切であり、それを示す名称も大切である。他の委員から意見があったが、名久井農業高校という名称は、これまで受け継がれてきた伝統があるが、これからの学校が目指すものを前面に出した名称とすることも考えられる。また、重点校という名称が、重点ではない高校があるという誤解を与えかねないため、その名称も含めて検討することも考えられる。

- 総合学科の特徴について、事務局に伺いたい。
→ (事務局) 総合学科の特徴は、普通教育の学びだけではなく、職業教育を主とする専門的な学びも選択でき、例えば、流通ビジネス等の商業に関する学び

や福祉に関する学び等、多様な学びを生徒が選択できるところにある。総合学科では、1年次は共通の学びを行い、それぞれの興味・関心や進路志望に応じて、2年次から各系列に分かれて学習を行っている。

○ 事務局の説明と私の総合学科に対するイメージはおおよそ合っていた。最近では中学校卒業段階で、将来のことを見通せない生徒が多い。例えば、南部町の中学生にしてみれば、名久井農業高校には農業の学びしかなく、もっと広く学びたいと考えると、八戸市内の高校や三戸高校を選択することになる。三戸高校では普通科の他に商業科目も学べるということがあったが、三八地区にも総合学科の高校があっても良いと考える。私立高校の入試に向けた面接練習において、生徒に将来のことについて聞くと「高校に入ってから、やりたいことを見つけながら進みたい。」という回答が多く、高校に進学してから自分が進みたい道を選べる高校があっても良いと考える。

○ 高校を選ぶ側の立場からは、通学方法も含めて、様々な選択肢があることが大切であり、生徒は大学進学につながる教科が選択できない、部活動の選択肢がないというのであれば、その学校を選ばない。自分がやりたいことが実現できるような高校が近くにあることが大事だと考える。そのためには、それぞれの高校に魅力や特徴が必要である。ただ高校を残しても魅力がなければ生徒は減少していくことにつながるため、県教育委員会と各高校による学校の魅力化に係る取組が大事だと考える。

○ 私立学校の状況についてお伝えしたい。今年度の県全体の私立高校の募集定員は3,800名であり、平成28年度から300名ほど削減している。この間、入学者が500名程度減少しており、令和2年度の定員充足率は青森県全体で0.71倍であり定員割れの状況にある。

次に、最近の特徴としては、第一志望で私立高校へ入学する生徒の増加があり、平成28年度は57%であったが、令和2年度は72%に増加しており、就学支援金の拡充により県立高校と私立高校の授業料の差がなくなったことが要因として考えられる。第一志望で私立高校を受検する生徒が増えたということは、私立高校の特色化の成果であると思う。県立高校では各校の特色を出しづらいのかもしれないが、県立高校の魅力化や特色化に取り組む必要はあるだろう。

○ 今後も少子化が進んでいく中で、小規模校だけが残ったとすれば、教員数も少なくなり、生徒の活動も狭められる。やはり、教員の立場からすれば大きな学校で勉強させたい。三八地区では委員の意見を基にした2つのシミュレーションを検討したが、第3期実施計画ではこの地区においても、大きな学校再編が必要になるのではないだろうか。

高校の魅力化について各委員から意見があったように、オブザーバーで出席

されている校長先生には、魅力ある学校づくりを進めていただき、これから高校へ入学することになる中学生や小学生に分かる形で情報発信していただきたい。

- 進行役から、今回の地区意見交換会の内容を踏まえ、資料1－6を修正し各委員に送付するよう事務局に指示があった。その後、各委員からの修正意見を踏まえ、最終的に進行役が内容を確認し、三八地区意見交換会における主な意見として県教育委員会教育長に報告することを確認した。

4 閉会